金剛院の執金剛神・深沙大将像について
――二尊の組み合わせをめぐる考察――

松岡久美子（近畿大学）

京都・金剛院の執金剛神・深沙大将像（以下、金剛院像）は、伝来の経緯は不明ながら、快慶の無位時代の作である。この二尊を対とする例は、他に和歌山・金剛峯寺所在の一対（以下、金剛峯寺像）が知られるのみである。金剛峯寺像は重源の『南無阿弥陀仏作善集』高野新別所の条の「執金剛身深蛇大王像各一躰」にあたるとみられる。建久8年（1197）頃に重源の勧進により快慶によって製作されており、納入品に見る人名はいずれも東大寺南大門金剛力士像に確認される。金剛峯寺像、金剛院像ともに快慶の作であることや快慶と重源の関係を勘案すれば、執金剛神と深沙大将の組み合わせ自体が重源のもとで成立した可能性は高い。しかしこの二尊を対とする背景は未だ明らかにされていない。

金剛院像は、執金剛神を東大寺法華堂安置の執金剛神像（以下、法華堂執金剛神像）の写しとする点に大きな特徴がある。法華堂執金剛神像は、東大寺開山の良弁の本尊、聖武天皇と良弁が出会う契機となった霊像として信仰された。注目すべきは、平安後期以降しばしばこの像と関連づけて語られた良弁と聖武天皇の前生譚である。すなわち“前世に震旦の求法僧であった良弁が天竺への途上に流沙を渡りかねたとき、流沙の船師であった前世の聖武天皇が彼を助け渡した。この功徳により聖武天皇は今生で国王に生まれ、良弁は報恩の誓願により聖武天皇の東大寺創建に助力した”という（『七大寺巡礼私記』ほか）。

平安後期以降、次第に、天竺は神仏の佑助なくては到達しがたい霊地であり、流沙は渡天最大の難所にして震旦・天竺の象徴的境界であるとみなされるようになった。その背景に玄奘の渡天求法譚があることは言うまでもない。そして深沙大将こそ、玄奘を流沙にて助けたとされる神である。執金剛神と深沙大将は、流沙という象徴的な場を物語の舞台として共有しつつ、天竺と震旦・和朝を橋渡しし、仏法興隆をもたらす存在として相通じる。

南都の仏教界は自らの教義は天竺まで遡ると自負しており、東大寺はそのひとつの象徴であった。治承の兵火後の東大寺復興は、単に諸堂諸仏を再興するのみならず、天竺とのつながりをも再構築しようとする性格を持った。金剛院像の造像時期は、快慶の活躍期から考えて治承の兵火後とみてよい。法華堂の執金剛神と、仏教東漸に功あった玄奘の守護神たる深沙大将は、東大寺復興の守護にふさわしい組み合わせとして見出されたと考える。

一方、金剛峯寺像では安置先の場所柄もあってか、二尊ともに玄証ゆかりと考えられる由緒正しい図像が採用された。その結果、東大寺復興の主題は背後に霞み、流沙を越えて天竺と震旦・和朝とを結びつける仏法東漸の主題が前面に押し出されることになった。こうなると執金剛神の存在理由は希薄となる。流沙を越えての仏法東漸の物語への注目は、深沙大将と対となる存在として玄奘を見いだす舞台を用意することにも通じてゆく。